

社会運動としての就活デモを振り返る
オオタキマサシ

- 1、はじめに――「就活くたばれ」から四年
- 2、就活デモとはなにか、就活の何が問題なのか
- 3、就活デモはなぜ生まれたのか
- 4、就活デモの意義
- 5、就活デモの問題点、反省点、疑問
- 6、おわりに

1、はじめに――「就活くたばれ」から四年

この五年ほどの間に、「就活デモ」と呼ばれる活動が各地で行われた。ある時は「就活くたばれ」、ある時は「就活ぶっこわせ」、ある時は「就活したくない」等々、様々な名称を冠しながら行われたそれらは、昨今大学生にとって悩みのタネとなっている就職活動、いわゆる「就活（シューカツ）」なるもののあり方に異議を唱え、疑問を呈し、改善を求める動きであった。

今回は、こうした動きのそもそもの原点である「就活くたばれデモ」という街頭デモの発起人となった僕が、この就活デモなる動きについて少し振り返ってみたい。「就活デモとはなんだったのか」ということが言えればいいのだが、おそらくそのような包括的なことはあまり言えないだろうとも思う。その理由は、就活デモというのは、中心を持たないネットワーク的な活動だからである。僕が言い出しっぺとして行動が始まったのは事実であるが、しかしそれぞれのデモは、それぞれの地域の人たちが主体的に担い、形になったものである。別に僕が全てのデモを仕切っていたわけでもないし、それぞれのデモの仔細な事情を必ずしも僕が把握しているわけでもない。そうした意味でも、就活デモは誰のものでもないし、僕だけが特権的に就活デモを総括するようなことはできない。

しかし、その上で、可能な範囲で就活デモと、それを取り巻く事柄について、簡単なまとめと雑感を書いてみたいと思う。

今回の文章のおおよその構成としては、まず、就活デモとはなにかという基本的な事項と、現在の就活を巡る問題点、そして就活デモが生まれた社会的な背景について簡単な説明をする。続いて、就活デモという運動の意義というものを考えたい。ある社会運動においてどのような成果があったのか、どのような意義があったかということは明確に検証しづらいものではあるが、その一つの可能性を書きたい。そして、次に就活デモを経て、僕がそこに対して抱えている疑問や問題点などを提示したい。運動においては、ともするとそのポジティブな側面ばかりが評価され、記録されてしまうことが少なくないが、実際の現場では、そう簡単には語れない葛藤や苦悩が生じている。それらは必ずしも明るいもの

ではないし、簡単に答えが出るようなことでもない。しかし、そうした問題点を正面から見据えることが、これからの運動のあり方を考える上でも必要なのではないかと考えている。今回の文章で、僕が本当に書きたかったのは、この「問題点、反省点、疑問」の項目であるし、就活デモがどんなものか知っている人や、デモ関係者には、その部分だけ読んでいただくのでも構わない。少しでも、そこに共感と戸惑いを感じてもらえれば、僕としては幸いである。

2、就活デモとはなにか、就活の何が問題なのか

まず、「就活デモとは何なのか」ということについて説明しなければならない。しかし、この定義は少しだけ難しい。

というのも、これまで何年もかけて全国各地で行われてきた「就活デモ」と呼ばれる活動において、完全に統一された見解・主張というのはないからだ。何をすれば「就活デモ」と呼べるのかは厳密にはわからない。これは就活を巡る問題点が多岐に及んでいるということのあらわれでもあるのだが、ポイントはいくつかある。それは、主に大学生の就職活動（いわゆる「就活」）を取り巻く問題点について、その当事者である大学生などが主体となって抗議し、問題提起し、また改善のために働きかける活動であり、その際に街頭でのデモ行動という方法をアピールのために用いる、ということ。これらは「就活デモ」という活動の共通点として指摘できるだろう。

また、そのデモは主に11月23日に行われることが多い。この日にデモを行うのは、「勤労感謝の日」というイベント性のある日取りに合わせたら面白い、という僕の素朴な思いつきによるものであるが、同時にメディアも労働に関するネタを求めている日であるため、新聞やテレビなどの取材を受けやすいというメリットもある。ちなみに、就職の前段としての就活に苦しめられている身としては、「勤労に感謝なんかできねえよ。それ以前だよ」という感情を持っていることも少なくないので、この祝日自体へのあてつけの感情も含まれているものと、僕個人は勝手に思っている。

これまで行われた就活デモと呼ばれる行動は、僕の知る範囲では以下のものになる。

2009年

11月23日

就活くたばれデモ（札幌）

就活のバカヤロー！！デモ（東京）

2010年

1月23日

就活くたばれデモ@TOKYO (東京)

11月23日

就活くたばれデモ (札幌)

就活どうにかしろデモ (東京)

ここがヘンだよ就活パレード in 関西 (大阪)

シューカツしたくないよお〜☆パレード@松山 (愛媛)

2011年

11月23日

就活ぶっこわせデモ (東京)

タダの学生がびびりながらする！カルト就活やめなはれデモ (京都)

2012年

11月23日

就活デモ 2012 (東京)

2013年

11月23日

就職活動問題アピール@神戸 (兵庫)

この中で、僕が直接関わったのは、札幌での二回のデモ(2009年、2010年)だけで、その他は、それぞれの地域の学生たちが、主体的に企画し、実行されたものである。また、就活の問題点について発言したり考えるために、イベントを企画したり、新聞・テレビの取材に応じたりということは様々に行われている。また、目立った活動として、永田町・参議院議員会館内での集会(院内集会)が二度行われている(2011年2月22日行われた「"就活"が抱える問題に関する院内集会」と、2012年3月16日に行われた「就活の問題を訴える院内集会」。前者は、2010年の「就活どうにかしろデモ」実行委員会を中心として行われたもので、後者は2011年の両デモ実行委員が中心となって開かれた)。院内集会は、一般の人も参加することができるが、国会に近い議員会館内で行われるために、国会議員へ問題を訴えるために効果的である。また、関連して国会議員への陳情などのロビイング活動も行われたりした。

その他に、2011年の就活ぶっこわせデモからは、就活について弱い立場に置かれた就活生の権利向上のための「就活生組合」という活動が派生しているが、発足から間もなく、諸般の事情によって解散している。

就活の問題点とはなにか（ハード面）

では、そもそも就活デモが問題としたような就活における問題点とは何なのかということについて考えたい。就活をめぐる問題点は多岐にわたっており、またそれを論じる立場によっても異なる。しかし、基本的な前提としておくべきことは、就活という場面において、採用される側である学生は、とにかく弱い立場に置かれているということである。就活生たちは、内定という（とりあえずの）安心を人質にとられたまま自らを売る存在（売り手）であり、そして彼ら・彼女らを採用するか否かの生殺与奪を握っている企業側は、それを自由に買い取ることができる（買い手）。それゆえ、その過程において理不尽な状況があっても問題化しづらい。ここでは就活デモが提起したような、そうした学生視点での問題意識にそって考えたい。

あくまで便宜上の表現ではあるが、就活の問題点は大雑把に言って二つに分けられる。ひとつは、就職一般に関わる構造的なもの、強固な雇用慣行に関わるハード面のものであり、もうひとつは、一般の就職活動や海外のそれとは異なる、主に新卒就活の場面において蔓延している独特の価値観や規範（いわば「就活カルチャー」）などのソフト面のものである。

ハード面として主に考えられる問題点は、主に以下のようなことである。就活開始時期の早期化および長期化、低い就職内定率、就活のための就職留年、費用負担、そして新卒一括採用などである。早期化に関しては、ここ数年で少し流れは変わりつつあるが、現在、大学生が就活を開始するのは、大学三年次の冬（12月から）である。就活デモが初めて行われた09年の時点では、企業の採用活動は秋から開始されており、それらとも関連して企業へのインターンシップなどが夏頃からは行われていた。そして、順調に行けば春頃（今年は後ろ倒しされているのもっと遅いかもしいが）から内定が出始める。しかし、上手く行かず長引く場合、開始から大学卒業までの一年近くを就活のために費やすこともある。そして、多くの説明会や面接などは平日に行われているため、就活生は大学の授業やゼミなどを欠席して、選考に挑むことになるのである。特に、専門的な勉強が進み、卒業論文などにじっくり取り組むべき時間を就活に奪われてしまうというのは大きな損害であるだろう。もちろん、その間の精神的な負担も大きい。

また、東京に本社がある大企業などでは、その説明会や面接なども東京で行われることが多い。そのため、地方在住の学生は、3~4回ほどもある面接のために、わざわざ東京まで出向くことになるのだが、その際の交通費や宿泊費などは、（最終面接などを除いて）自己負担である場合が少なくない。本州の学生は夜行バスなどを利用しているようだが、北海道から向かう場合はどうしても飛行機を使うしかなく、その際の負担はとても小さなものではない。札幌で就活デモに参加したメンバーの一人は、就活を通してどれだけの出費があったかについて、「交通費、宿泊費、食費など合わせて、車の免許が取れるほど（30万

円ぐらい)」と語っていた。就活に挑む学生でも、地域などによってその条件は何ら対等ではないのである。就活デモが、東京ではなく札幌という地方都市から始まったのも、こうした事情の深刻さを反映していると言えるだろう。

ところで、なぜ日本の大学生は在学中に就活をするのだろうか。というのも、海外では大学在学中に就職活動をするということは決して一般的ではないからである。たとえば、ヨーロッパなどでは学生は大学を卒業した後、それぞれ好きな時期に求人情報を頼りに個別に試験や面接を受けるという場合が多い。

日本の学生が、大学での勉強をおろそかにしてまで、就職活動に勤しむのは、この国で新卒一括採用という雇用慣行が浸透しているからである。これは終身雇用を前提とした年功序列制度と一体となって「日本的経営」などと呼ばれ、一時期海外でも注目されていたものである。要するに、新しく高校・大学を卒業するもの（新卒者）を企業がまとめて雇用し、教育していくという方式である。企業は、特定の職務に限定して求人かけるのではなく、一定人数を雇い、それから会社内外での変化に合わせて、必要な部署に振り分けるという形で人員の調整をしてきた。特定の業務ではなく、その集団（企業）に帰属する形での採用が行われるのを、職務を限定した上で求人を出し、採用する「ジョブ型」と対比させて、「メンバーシップ型」と言ったりもするが、日本ではほとんどの企業で、こうしたメンバーシップ型の労働が採用されてきたのである。

かつては、こうした仕組み自体が奏功したこともあったが、現代では様々な産業構造などの変化により、必ずしもそうとは言えなくなっている。しかし、新卒至上主義とも呼ばれるように、「既卒よりも新卒」という風潮（企業文化）は未だに強固で、それに合わせて、就活のレースも横並びで始まることになっているのである。

このような新卒一括採用方式は、一方で新卒生に有利なように見えるが、他方で新卒時に正社員の働き口を確保できなければ、その後の挽回が難しいということも意味している。バブル崩壊後の就職氷河期に卒業を迎えた、いわゆる「ロスジェネ」世代の多くが低賃金で不安定な非正規雇用労働者として生活せざるを得なくなったのは、この新卒一括採用（新卒至上主義）と終身雇用に基づく、年功序列制度の持つ排他的な性格の影響とって差し支えない。

そして新卒一括採用（新卒至上主義）が強固に存在している以上、大学生達は自分の適性さえも分からず、十分な社会的経験も積む前から、学生の本分であるはずの学業を横において、就職のための準備に奔走しなければいけないのである。

ちなみに、多くの学生にとって就活の悩みの種となっている問題として、「選考基準が不明確」というものがある。すなわち、試験や面接などで「なぜ落ちたのか」「なぜ通ったのか」という理由が全く分からないということである。多くの企業は、求める人材像として、「コミュニケーション能力がある」「人間力がある」「リーダーシップがある」などといっ

たことを言うが、これではあまりに抽象的で、ほとんど何も言っていないに等しい。面接での受け答えで何かが決まるとしても、そこで見られている基準が分からなければ、落とされた側としては納得がいかないし、反省も対策のしようもない。また、後でも述べるが、理由もわからず不採用と言われ続けることは、自信喪失や自己否定感情にもつながってくる。

ここで採用基準が不明確であるのは、端的に言って採用する側にもはっきりした指標がないからである。ジョブ型のように、その職場でどのような職務を行うのかがはっきりと決まっていれば、そこで必要となる能力というのでも客観的に示しうるし、判定もしやすいが、メンバーシップ型の採用ではそれができない。これは、先に述べた新卒一括採用の負の側面の一つであり、やはりこれが就活における問題を複雑にしているもっとも大きな要因の一つであると言えるだろう。

就活の問題点（ソフト面）

就活の問題点のふたつ目は、一般の就職活動や海外のそれとは異なる、主に新卒就活の場面において蔓延している独特の価値観や規範（いわば「就活カルチャー」）などのソフト面のものである。

日本で就活というものに参加する場合、それは単に就職するために面接を受けたりする、ということには留まらず、そこにまつわる様々な「就活カルチャー」と付き合いがないといけないことが多い。よくある話で言えば、服装やマナーなどでの「こうすべき」といった類のものである。たとえば、女性の話で「銀行系を受けるなら（パンツ・スカートではなく）、絶対にスカート着用。ヒールは○cm以内」であるとか、「就活メイクのやり方」といった類の話である。一定程度は、ビジネスマナーなるものの延長であるのかもしれないが（それ自体も不思議なものではあるが）、それとはさらに別のところで就活における独自の規範が形成されているとしたら、その根拠はなんなのか。

このような、どう振る舞うべきかといった曖昧な部分において、不確かな「公式」がまことしやかに出回り、そして就活アドバイザーのような人々がそれを声高に説くことを商売として跋扈している。もちろん、それにどのような根拠があるのか、ということは明らかにならないし、真偽のほどは定かではないのだが、しかし就職における採用基準に明確なものはない。「そうらしい」という情報があれば、まったく無視するわけにもいかない。そうして標準化され、規格化された就活生が出来上がるのである。合同説明会などに行くと、真っ黒なスーツに身を固めた就活生の大群を見ることができると、何か異様なものを感じてしまうのは僕だけではないだろう（同時に、就活が進むに連れてそうした光景や規範に慣れていく気持ちがあるのも、またおそろしいことでもある）。

また、価値観のレベルでも、就活は単なる「就職活動」とはいえないような価値観の巢窟となっている。たとえば、有名な就活対策本の『絶対内定』には、そこかしこに「夢」

や「熱意」、「やりがい」、「成長」といったキーワードが散りばめられているⁱⁱ。就職というものを考えるということは、単に特定の職業につき、そこで生活するための賃金を得るということに留まらず、自己のこれまでの生き方を振り返り、そして将来の目標などを実現するための、いわば自己実現のための場所となっているのである。実際に、就活におけるエントリーシートや面接では、そうした姿勢が求められる場面が少なくない。夢について語ることが職業の話につながる、というのはわからないでもないことではあるが、しかし就職するだけのために、誰もが夢を持たなければいけないのだろうか。ここには歪みがあるように思われる。

しかも、そうした価値観に忠実に、自分の人生と実存をかけて面接などに望んでも、それで不採用になってしまえば、自分の実存までが否定されたような気分になるだろう。また、何十社もエントリーするのが当たり前の昨今の状況では、毎回、自分の実存の延長線上にその会社の存在を位置づけることは難しい。だから、多くの学生は、エントリーする企業のために、自分のこれまでの人生を、選考に有利なように加工したり、抽出する作業を求められる。就活で苦勞していた僕の友人は、この抽出・加工（場合によっては捏造）の作業を（歴史修正主義になぞらえて）「自分史修正主義」と呼んでいたが、興味深い表現だと思う。そのようにして、就活生は、多くの嘘と、嘘とはいえないまでも誇張の多い表現で塗り固められた存在になって就活レースの中をサバイブしていくはめになる。

また、就活のシステムや学生の不安につけ込んでの商売にも禍々しいものがあり、就活というのは市場として一定程度の規模を持っているようである。そうした就活ビジネスのもっとも代表的なものは、就活のレースを煽るような就職関連企業の就職サイト（リクルートのリクナビや、毎日コミュニケーションズのマイナビなど）であるが、一つ一つの商品に関しても、あげていけばキリがない。「リクルースーツ」などの服装に関するものに始まって、新聞の営業は「就活で役に立つので」と言って購読を勧めるし、スマートフォンが今ほど普及していなかった数年前には、「スマホで就活」といった広告を見たこともある。「就活で有利なボールペン」などにいたっては、普通のボールペンとの違いすらわからないのだが、何かご利益（！）がありそうな気がしてくる。

他にも、内定獲得のためのハウツーや心構えを伝授する「就活塾」が受講者を集め、自己啓発セミナーのような形で合宿が行われたり、極端な例では（なぜか）滝行やら座禅をさせる、といったものさえある。就活というのは、もはや単なる就職のための活動というよりも、もっと精神的な修行のようなものなのかもしれない。

2011年の京都における就活デモは、「カルト就活やめなはれデモ」と命名されているが、これは就活においてはびこる価値観が、単なる労働を巡るものを超えて、あまりに異形の、精神論的なものとなっていることへの批判であり、今述べたような現状に対しての問題意識があるものと思われる。

このような異形の就活レースを耐えたとしても、それが内定獲得や、希望の就職には繋がるとは限らない。何十社という数のエントリーをして、落とされ続けるということも珍しくない。労働問題を取り扱う NPO 法人の POSSE が行った就活に関する調査では、就職活動中にうつ病と診断されてもおかしくない精神状態を経験しているものは、14.4%と（7人に1人）という数字も出ているしⁱⁱⁱ、実際、就活を主な原因として自殺する若者も、ここ数年で増え続けている。また、苦労して入社した企業であっても、そこで安定した働き方ができるという保証はない。厚労省が 2013 年に発表した大卒新規採用者の 3 年以内の離職率は 31.0%となっており、年による変化はあれど、おおよそ「三年で三割が離職」というのが現状のようである^{iv}。そして、その中にはブラック企業のように、若者を使いつぶすような企業も一定程度、存在しているものと思われる。

このように就活には問題点が様々にあり、自殺者まで出しながらも、しかし、加熱したレースがおさまる心配がないのは何故なのか。理由は様々に考えられるだろう。先に述べたように、新卒から既卒になってしまうことをリスクとしているということの他にも、世界でもトップクラスに高額な学費をまかなうために借りた奨学金（学生ローン）を返済するために、少しでも安定した就職を求めてしまう気持ちや、あるいは就活過程で刷り込まれた「希望の仕事への就職＝自己実現」という価値観の中で、就職しない（できない）ことが猛烈な自己否定感情に繋がるという場合。また、親や周囲からの期待やプレッシャーや、就活を当たり前とする友人たちと異なる道を歩むことで生まれる不安などもあるだろう。

だから、就活があまりに悲惨で、理不尽なことに満ちていようとも、簡単に「就活しなければいい」という話にはなりづらい。とにかく、多くの学生にとって、この就活という問題は、避けては通ることが難しい大きな問題として立ちはだかっていると言える。

こうした様々な問題に対して、就活デモ側の用意した代案としては、就活どうにかしろデモ実行委員会が作成し、議員への要望として提出した「就職活動基本法」（案）が、もっともまとまったものになるだろう。内容は以下のとおりで、企業、大学、行政に、包括的な要望を出している。

1. 企業側の責務

(1) 採用活動によって、学業を阻害しないこと。

広報活動・採用活動は教育課程を修了した遅い時期(広報活動は最終学年 8 月以降・採用活動は、学事日程が最終学年 2 月以降)に開始すること。また、広報活動は長期休暇・週末・夕方以降に実施すること。

違反した場合には、企業名公表・罰金・翌年採用禁止等の罰則を適用する。

(2) 仕事内容と必要なスキルを明確化し、合理的な選考基準を募集の際に明示すること。

可否の理由について、応募者からの求めにより選考基準に照らし合わせた説明をすること。また、合格の場合のみ連絡するのではなく、不合格の場合でも必ず可否連絡を行うこと。

- (3)労働条件を開示すること。賃金や待遇の情報はもとより、企業の労働環境を判断できる情報を開示すること

開示情報：36 協定の締結の有無及び時間、平均残業時間、有給休暇の消化率、育児・介護休業の取得率、平均勤続年数、女性の管理職割合、男女別勤続年数、障害者雇用率、労働組合の有無、離職率、労災発生数など

開示方法：ハローワークの求人票や有価証券報告書への記載、ハローワークおよび就職ナビサイトによる公示システムの構築

- (4)採用活動の際、新卒・既卒、顔写真、年齢、男女等の情報を履歴書・エントリーシート等によって開示させることを禁止する。

2.大学側の責務

- (1)就職活動の支援を行い、企業や行政と連携を深めること(大学内にハローワークの端末を置く、地方大学主催で東京本社の企業の説明会を行う、等)。就職活動の支援に関しては、在学中の学生だけではなく、卒業後の学生も対象とすること。
- (2)就職実績を開示する際、曖昧な「就職希望者数」を分母にした内定率ではなく、卒業見込み学生数を分母にした内定率を用いること。
- (3)講義の目的・意義を明確にすること。具体的には、講義を受けた結果得られると期待される能力、及びその社会との接続について学習計画書(シラバス)に明記すること。

3.行政の責務

- (1)中小企業を含む求人情報をハローワーク等で適切に提示することで、営利目的のナビサイト等に頼らない、企業間・学生間の公平な競争を実現すること。
- (2)求人を出す企業における事前の労働条件等のチェックを徹底すること。
- (3)大学卒業後も就職活動を継続する者には、失業手当に相当する給付を行い、手厚い生活費支援を行うこと。
- (4)奨学金の返済に関して、卒業時に就職が決まっていない学生については、無条件に返済を猶予すること。
- (5)内定の取消しは解雇と同じ取扱いにすること。
- (6)内定率は、全数調査によって算出すること。

3、就活デモはなぜ生まれたのか

ここまで、就活デモの概要と、就活がはらむ問題点、そしてそうした現状に対するデモ側の改善案について簡単に見てきた。しかし、就活にいくら問題点があろうと、誰もがそれに対して異議を唱えて行動するわけではない。就活デモが生まれるためには、就活へのぼんやりとした問題意識が社会的なものとして構築される必要があった。ここで僕がデモをしようと考えた、その背景を少し説明したい。以下に書く内容は、詳しくは以前に「就活くたばれデモはなぜ生まれたのか」というタイトルで、就活デモ札幌（2010）のブログに載せたことがあるので、気になる方はそちらを検索して読んでいただきたい。

貧困問題から就活問題へ

僕が、就活デモのような活動を始めようと思ったのは、何もある日突然「就活は問題なのだ」と思い立ったわけではなく、様々な下地があった。特に、北海道大学の在学時に、札幌で野宿者（ホームレス）支援の活動に参加していたことが大きく関係している。僕がその支援活動に参加し始めたのは2007年だが、その頃は日本においても「格差社会論」というのが取り沙汰されていた時期である（この当時、話題を呼んだ重要な文章の一つである「丸山眞男」をひっぱりたい」と題した文章が発表されたのは2007年1月^{vi}）。アルバイトや派遣などの非正規雇用がかつてないほど拡大し、従来、一般的とされてきた正規雇用の枠が削られていく中で、正規社員と非正規社員の間での給与や待遇での格差が広がっていった。それは、さらに時間を経ることで、「貧困問題」として語られるようになった。当時、日本に暮らす多くの方は、日本を「豊かな国」「先進国」として認識していただろうが、そうした認識と対峙するように、日本の貧困問題は社会問題として報道され、取り上げられるようになっていく。もっとも、どんな先進国でも貧困層というのは存在するのだが、それまでの日本では貧困とはアフリカなどの海の向こうで起こっているはずのものであった。そのため、この問題は衝撃を持って迎え入れられ、「貧困問題ブーム」とでも呼べるような状況が、メディアを中心に起こった。

ここで重要なのは、こうした貧困問題はほうっておいて自然と問題化されたわけではなかったということである。この国の貧困が社会問題として認識されるようになったのは、様々な支援団体や個人によって、解決のための行動やアピールが起こされたからであった。それが反貧困運動と呼ばれる社会運動である。反貧困運動は、ホームレス・生活困窮者支援団体や労働組合、法律家、研究者など、様々な人々によって担われたものだが、そこで基本的な主張の一つとして、「貧困は自己責任ではない」ということが打ち出されていた。はじめに格差社会が問題として浮上した頃には、それを「努力の結果」など、個人の問題として還元するような議論が少なくなかったし、その際には「自己責任」という言葉が濫用されてきた。しかし、実際には雇用システムの構造的、制度的な変化が、人々に不利な状況をもたらしてきたのであり、それは自然現象でもなければ、ましてや不利な状況に置かれた個人の責任でもない。そのため、反貧困運動においては、こうした自己責任論に反

論し、本来であれば、貧困の拡大防止に責任を持つべき国家に、その責任を問いただし、同時に、利益を優先して人間を使い捨てる企業のフリーハンドな活動への批判を展開したのである。構造的な問題というのは、注意しなければ「当たり前」と捉えられ、不可視化されてしまうことが珍しくないのだが、貧困問題についての議論も全く同様であった。

そして、当時、僕自身はそうした議論を日々目にしながら、現場で野宿者の支援活動に関わっていた。そのため、反貧困運動において展開された議論は、当時の僕にとって非常に身近なものであった。ところが、僕の周囲の友人がより深刻に直面していたのは、就活の問題であった。僕自身はその頃、大学を一年間休学していたために、まだ就活を体験したわけではなかったのだが、誰もが就活というものに対して何らかの不満を口にしていたことが気になった。そして、それとは対照的に、大学内には就活を肯定的に捉えた情報（合同説明会の告知や、内定者による就活アドバイスのイベントなど）が溢れていた。「多くの人が就活に対する不満を持っているのに、それが表立って出ていない」ということに、僕は強い違和感をおぼえた。同時に、就活について多くの人が口にする不満というのは、決して個人的なものではなく、構造的なものなのではないか、と思った。

ここまで説明すれば充分だと思われるが、貧困問題における議論を、就活に関して応用したのが就活デモなのである。先にも見たように、就活というのは基本的には日本の雇用慣行が生み出した構造的な問題である。少なくとも、学生の側に責任があるものではない。にも関わらず、それが問題であると指摘されなければ、多くの人が疑問を抱きながらも、それはあくまでも個人的な努力によって克服すべき事柄に還元されてしまう。逆に言えば、「就活には問題がある」と指摘することは、就活が持つ様々な問題点を、「個人個人のいたらなさ」「努力・能力不足」に還元し、「しかたないこと」とするのをやめ、「社会的な問題」として構築し直すという意味がある。すなわち、「悪いのは私たちではなく、就活のシステムである」という視点の転換が、そこには生まれるのである。これはなんとかしなければいけないと思った。

また、ここでは紙幅の関係で割愛するが、僕は以前からデモという手段に興味があり、それを行使してみたいという気持ちがあった。反貧困運動や、その他の運動において、自分たちの意見を堂々と表明する手段としてのデモというものに関心を持っていたのである。そもそも道路という公共空間を使って堂々と言いたいことを叫ぶ機会なんてそうそうない。これは活用しない手はないと思った。「就活に問題があるのは明白なんだから、文句の一つぐらい言ったっていいじゃないか。くたばれ!」。こうして就活デモのアイデアは生まれた。

就活くたばれ! と叫んでから

僕は、周囲の友人に呼びかけたり、大学内でチラシを掲示したりして、仲間を集め、計

画を練った。「服装は自由（リクルートスーツ着用のこと）」という皮肉のような呼びかけ文に応じて、当日、集まった人数は二十人弱ほどであったが、デモとしては意外にも様になっていたと思う。雨上がりの晴天下、拡声器やプラカードを持って道路を歩きながら、道行く人にアピールするというのは新鮮で、非常に解放感があったのを憶えているし、参加者の多くもその意識を共有していたものと思う。デモの後の打ち上げの場で、僕たちは就活デモを取り上げるニュースの映像を、ワンセグ対応の携帯で見ながら歓声を上げた。

また、同日には、東京・早稲田でも同様の趣旨によるデモが行われた。これは、mixiのコミュニティ上で僕が呼びかけたことへの応答で、就活デモは初回からネットワークを駆使した同時行動をしていたのである。

ちなみに、最初のデモを行う時点で、僕はこれがどれだけの反響を呼ぶかということについて、何の予測も立てていなかった。しかし、「就活は問題である」ということを、学生の側から問題提起する動きはその時点で全く見られなかったため、それが1でも、0.1でも、なんらかの反響があればそれだけでも意味があると思っていた。

そして、反響は予想以上だった。事前に札幌市政記者クラブに告知のチラシを持っていたことなどもあり、デモ当日は北海道新聞とUHB(フジテレビ系列の北海道ローカル局)、そして北方ジャーナル(北海道のローカル誌)からの取材を受けたのだが、この北海道新聞のインターネット版の記事が主にネット上で話題を呼んだ。50のブックマークがつけばホットエントリーとみなされる「はてなブックマーク」において、500を超えるブックマークを獲得し、2ちゃんねるのニュース速報だけでもパート10以上のスレッドが立っていた(コメント数で一万件以上)。ちなみに、はてなにおいては「もっとやれ」などの好意的なコメントが多いのと対照的に、2ちゃんねるにおいては「甘え」「自己責任」といった、あまりユニークとは言えない批判コメントが多かったように思うが、やはり共感の言葉は一定程度あった。

就活デモを実行した僕たちは大いに盛り上がった。デモに参加したあるメンバーは、「自分たちの活動が言論をつくっているということに興奮した」と後から述べている。大げさに言えば、民主主義を標榜するこの社会の中で、選挙などに行ってもさして味わうことのできない「政治参加」というものを、初めて実感した瞬間だったといえるかもしれない。

そして、2ちゃんねる上のいくつかの板でスレッドが立った中で、次回の就活デモに繋がるきっかけを作ったのが、大学生活板である。ここで、(東京で就活デモが行われたことを知らずに)「就活くたばれデモを東京でもやろう」といった趣旨のスレッドが立てられ、それは翌年2010年1月に東京・銀座のリクルート本社前を通るルートでのデモ(就活くたばれデモ@TOKYO)として結実した。実行委員は一度も顔を合わせぬまま、Googleグループなどを利用して情報交換を行い、企画を進めたのである。

僕も参加したそのデモは、お世辞にも計画性や準備の段取りが良かったとはいえないし、また当日参加した人数も十五人ほどと少なく、それ自体が大きく成功したとはいづらい。

しかし、このデモの企画で中心になったり、参加したうちの幾人かは、その年の11月に東京で行われたデモ（就活どうにかしろデモ）の中心メンバーともなった。その意味で、このデモは就活デモの歴史の中であまり認知されていないかもしれないが、重要な出来事であったと言えるだろう。

その後、僕はtwitterのアカウントをつくり、そこで就活問題や社会運動の意義について積極的に発言をするようになり、同様の問題意識を抱えている人々とのつながりができていく。それらを通して、翌年の就活デモにつながるネットワークは形成され、就活デモの動きは拡大し、2010年のデモは四都市同時開催されるまでにいたった。僕が直接に関与した就活デモはここまでで、それ以降何らかの形で毎年行われているデモについての情報は、様々に耳にはしているが、僕は基本的にタッチしていない。なので、そこからの記述は他の人に託されるべきだろう。

ともかく、札幌の街から始まった就活デモは、インターネット上でのやり取りや、そこを介して作られた様々なネットワークを通して発展していくことで、各地でのデモや、就活問題へ取り組む行動の端緒を開いたのである。

4、就活デモの意義

それでは、就活デモの意義とはなんなのだろうか。ここでは就活デモがどのような意義を持ち、社会に影響を与えたのかということを考えてみたい。しかし、ここには少なからぬ困難も伴う。これはデモのような抗議・アピール行動が不可避的にはらむ問題であるが、デモのような運動によって変化し、改善された問題があっても、その因果関係は決して明確にはならないからである。たとえば、政府がある政策への抗議行動の影響を受けて方針を転換したとしても、彼らは「デモがあったから変えました」とは言わない。運動側が「運動の成果だ」と言わなければ歴史は記録しないのである。その意味で、やや積極的にでも運動の主体が、そのポジティブな側面を語るが必要になってくる。

まず、最初に言及しなければならないが、就活をめぐる制度ということに限定して言えば、就活デモが出てきて以降、それが劇的に変わったということはない。制度的な変更点としては、「卒業から三年以内を新卒と同様に扱うように」といった「お達し」（厚労省の「青少年雇用機会確保指針」。強制力はない）が出されたことや、2011年からは企業の採用活動における解禁日が三年次の10月から12月に移行したこと（2015年からは4年次の4月からになるという）。新卒者向けの有給インターン制度などを行う「新卒者就職応援プロジェクト」などが実施されたことなどがある。これらについては、「少しは改善されているかもしれない」という程度のことは言えるかもしれないが、就活問題の根本的な解決には程遠いだろう（就活解禁時期に関しては一長一短であり、どちらが良いかは一概には言えない）。だから、就活デモのような活動にできることは限られている、ということは認めな

ければならないだろう。もちろん、そもそも社会に対して何かを訴えたり、改善を求める活動というのは、時間をかけた地道な行動が必要なもので、劇的な変化が起こることは少ないとも言える。

しかし、そうしたマクロな視点での変化の乏しさだけを取り上げて、「だからデモなんかしても変わらない」「意味が無い」というのはあまりに早計である。デモや、その他の抗議・要請行動は、1か0では割り切れないような、様々な影響や効果を持っているということを、ここでは考えてみたい。

「当事者」によるクレーム申し立てとしての就活デモ

3章で、就活デモを行おうとした背景として、「何かトラブルに直面しても、ほうっておくと個人の問題にされたり、ないことにされるので、それを社会問題として訴えたかった」ということを書いた。これはデモを始めた後に知ったことだが、声を上げることを通して社会問題を構築するという行為は、社会運動の研究の中で「クレーム申し立て」と呼ばれるものにあたる。そうした議論では、社会問題はあらかじめ客観的に存在するものではなく、デモや署名、陳情その他の言説や活動（これがクレーム申し立てにあたる）によって構築されるという視点に立つ。逆に言えば、どんなに社会に歪みがあろうとも、それが「問題である」と指摘されなければ、問題は存在しないのである。だから、その意味で反貧困運動も、就活デモも、クレーム申し立てとして問題を構築してきたと言えるだろう。

また、はっきりとしたデータがあるわけではないが、就活デモ以降、就活について批判的に語る言説はそれ以前と比べて明らかに増えたように思う。たとえば、書籍では、『大卒就職の社会学』（10年3月）、『POSSE vol.10 特集<シューカツ>は終わらない?』（11年2月）、『就活とブラック企業』（11年3月）、『これが論点！就職問題』（12年4月）、『現代思想 特集 就活のリアル』（13年4月）などが、就活デモ以降に出てきている。また、シンポジウムなどのイベントでも就活を批判的に捉え、考える動きというのは確実に出てきている^{vii}。

また、就活デモが新聞などで注目されたポイントの一つは、就活がはらむ問題について就活体験者、あるいは現役学生が主体となって持って声を上げたということである。ごく一般的に言って、社会的に弱い立場にあるものは、自分たちのことを自分たちで語る（表象する）機会を持ちづらい。往々にして、社会的に発言力のある者たちが、対象を一方向的に語るという非対称的な形で言論がつくられてきたし、そこでの対象への無理解が問題の解決を遅らせてきた。もちろん、一部の論者はそうした風潮に対して異議を唱え続けてきたが、その声に呼応するように、当事者的な立場から就活に異議を唱える声が聞こえるようになることは、それが社会問題として説得力を持って捉えられる上で不可欠であったし、就活デモは、そのポジションにはまることで大きな反響を呼んだのである。閉塞自体に抵

抗し、言論を広げる機会をつくったことは、重要な成果と言えるだろう。

また、上の項目ともつながるが、現状に対して異議を唱えることは、それによって批判されることもあるが、同時に同じような気持ちを持っている人と出会う機会をもつくり、それによってエンパワメントされる（力づけられる）ことがある。僕自身、就活デモを準備している段階から、「私も就活は問題だと思っていたんです」というような人に多く会ってきたし、それによって「この現状はおかしいと思っていたのは自分だけではないんだ」と勇気づけられることが幾度となくあった。

そして、同様の疑問や問題意識を持つ人が集まることによって、それまでバラバラで個人的なものとして認識されていた疑問は、実は集団的なもの、社会的なものであることが再確認される。それが、即、問題解決に繋がるものではないとしても、それぞれの心の中にあったモヤモヤした気持ちが言語化され、整理されていくこともあるし、専門的な知識を持つ人とつながることによって、問題がマクロな視点で理論的に説明されていく契機を持つこともあるだろう。

運動の結節点の一つとして

ところで、就活デモにおいてよく言われる批判の一つに、「主張は正しいが、デモという方法を使う必要は必ずしもない（もっと有効な方法がある）」といったものがあるが、もちろんデモだけが方法ではない。事実、就活デモに関わった各地のメンバーは、デモ以外の多様な方法を試している（学内でのパネルディスカッション、トークイベントへの参加、参議院議員会館における院内集会、議員へのロビイング等々）。だから、デモはそれ自体で完結するものでは決してなく、様々なアピールや活動とも共存しうる。

ただし、やはりそうした諸々のアピール方法の中でも、デモというのはインパクトのあるものであり、注目を集めやすかった部分があるというのは否定出来ないだろう。札幌のデモで運営に参加した僕の友人は、「就活の問題をなんとかしたいなら別に署名活動などでも良いのではないか（なぜデモなのか）」という、某就活関連ライターによる批判に対して、「『学生が就活をなんとかしてほしいという署名活動をしました』というニュースと、『就活に不満のある学生たちが街頭でデモをしました』というのでどちらがインパクトがあるかといえば間違いなく後者だ」と発言していたが、これについては僕も完全に同意するところである。存在が認知されなければ、同意どころか批判すらされないし、認知されることがなければ、社会に対して訴えかける行動としては失敗である。その意味で就活デモのラディカルな試みは成功しているものと思う。

また、就活デモのような動きは、社会のあり方を批判的に考え、それに対して行動するという経験をするための場所としても機能しているものと思われる。就活デモのような活

動に参加したり、そこでの価値観に触れることは、現在の社会の中で支配的な状況を相対化する視点につながるし、場合によってはそれに対して声を上げるということの練習にもなっている。これは就活のような、企業社会における規範が大学にまで強固に食い込んでいる中であって、特に重要な事であるのではないだろうか。ただ会社や社会のルールに従順になるだけが生き方ではないし、時には権利のために抵抗することも、この社会の中で生きる人間としては必要なことである。就活の場面では「グローバル人材」のような空文句が飛び交っているが、本当にグローバルな視点を持つなら、国際社会で当然認められるような権利主張のための行動の一つぐらいしないほうがおかしい。

また、3章でも書いたが、僕が就活デモのような行動を企画した背景には、野宿者支援や反貧困運動の影響がある。つまり、過去に行われてきた様々な社会運動の流れの延長線上にこうした行動はあるし、その流れはまた、これからも予想もしない形で影響を持つものだと思う。デモが行われたそれぞれの地域でも、そこに参加した学生の一部が、それぞれの問題意識から様々な行動を起こしたり、居場所作りに取り組んだりしている（たとえば高騰する学費・奨学金問題への抗議行動や、シェアスペース作り、コミュニティカフェの運営など）。かつての60年代における学生運動のような動きにあっても、様々な「挫折」に直面しながらも、ウーマンリブや、エコロジー運動、有機農業運動などを生むことで、豊かな副産物を生み出したものと思う。運動は、直接の目的以外にも、残るものはいくらでもあるのだと信じている。

社会運動というものの意義を考える際のポイントは様々にあるが、ここで述べたのはもっとも初歩的なものである。すなわち、同様の問題意識を持っている人が集まること、声を上げることは、それがどれだけマイクロなものであっても変化を呼びうるし、その延長線上で問題が改善していく可能性があるならば決して無駄ではない。重要なのは、長い目でその行動の影響を見ることだと思う。

5、就活デモの問題点、反省点、疑問

さて、ここまで申し訳ないぐらい長々と駄文を書き連ねてきたが、僕が本当に書きたかった部分はこの章である。前章のポイントは、「同様の問題意識を持った人が集まること」によってもたらされるポジティブな効果である。しかし、「人が集まる」という、まさにそのことによってトラブルが発生するというのも、実は同様にある。

ここからは、必ずしも就活デモに限らず、社会運動一般の議論とも絡めながら、こうした活動におけるポジティブな語りからこぼれ落ちるものや、ネガティブな側面に注目してみたい。ここからは、さっきまでとは大きく調子が変わるが、就活デモ初期の喧騒の後に訪れた、暗い沈鬱の中での思考の結晶になる。

「大学生・就活生の不満を可視化した」とはいうものの

先の章では、「就活デモは学生・就活生（就活体験者）の不満や疑問の声を表に出したことが、就活デモの功績の一つだ」ということを書いた。それは確かにあるのだが、しかし同時にそれが全ての大学生・就活生の声を代表しているわけではないということは、当然ではあるが留意する必要がある。

就活デモには無数の批判や誹謗中傷が寄せられているが、その中には少なくない数の大学生・就活生の声が含まれているだろうと思われる（ネット上の発言は誰が発信したものかわからないために、確かな事は言えないが）。就活生といっても、その立場は多様である。もちろん、現状の就活システムに上手くフィットして、何の問題も感じないという人もいるだろうし、問題があることを感じながらも就活デモの人たちの意見には賛同できないという人もいるだろう。あるいは、「問題意識は共有するが、デモというやり方には違和感がある」という人や、「本当ならばデモにも参加したいけれど、『顔バレ』などで不利益を受けるかもしれないのがこわい」、という人も少なくない。

こうした人々は、しかし、就活デモのやり方や意図とマッチしない人の中でもわかりやすいと言える。ここで僕が考えたいのは、本来であれば就活デモがおこなう問題提起に合致するような現状にある（就活に追い詰められている）人が、しかし何故か就活デモの主張に反発し、批判的な態度を取ってしまう、という現象があるということである。就活デモが提起したのは、就活のような仕組みが所与のものではないということであり、そこに付随する様々な規範や価値観は絶対的なものではないということである。しかし、いままさに就活によって苦しめられ、追い詰められている人の中には、そうした別の可能性があるという「希望」こそが、むしろ受け入れがたいものとして映ることもあるものと思われる。これは実に厄介な問題であるが、ある社会的な問題に直面している人が、その問題への変革の可能性（を提示する者）に反発を示す、ということは決して珍しいものではない。

たとえば、ある年に就活デモを企画した T さんの話を考えてみたい。彼女は、就活を実際に体験していた時期に、就活デモの存在を知り、自分の目でそれを見に行った。そこで、就活を堂々と批判できる人たちへ羨ましさを感じたり、就活を実際に行っている身として共感できない主張に対して強い反発を抱いたり、複雑な感情が去来したという。

彼女は、就活デモを知ったその翌年には、いったん就活をやめ、自分でも就活デモや、就活を考えるためのイベントを企画するようになるのだが、しかし、その際にも様々な葛藤が伴ったという。2章でも述べたが、就活をするというのは、単にそうした制度に乗るということではなく、そこに伴う一定の価値観や規範を内面化するということでもある。それらがいかに下らないものであるとしても、そうした価値観のインストール作業をある程度行わなければ、ルールに乗ることすらできない。そして、一度そうした就活のルールに乗り、規範・規律を受け入れながら（Tさんの表現によれば「就活教に入信しながら」）、その後には就活批判に転向したこと、そしてデモをしたことの反響としてネット上の無数の批

判にさらされることは、彼女にとって心が張り裂けるような気持ちを味あわせることになった。彼女にとっては、就活デモと出会ってもたらされた価値観の転換は、確かにそれまでの「就活教」という苦悩から解放されることでもあったかもしれないが、同時に新たな葛藤を抱えることでもあったのである。そして、企画したイベントやデモなどは無事に終わったものの、そこで抱えた葛藤については、同じく企画を実行した仲間にも話すことができているままに燃え尽きてしまったという。

この話から見えるように、就活的な価値観を内面化し、就活を体験した当事者であるからこそ、かつてそれを受け入れていた自分をも含めて批判せざるを得ないような形での就活批判には、どうしても葛藤や苦悩が伴うことがある。だから、場合によっては、既に内面化した就活的規範と齟齬が起きたり、心が分裂するような事態を避けるために、就活批判の言説に耳をふさいだり、就活批判をしている人々を批判する側に回る、ということもあるだろう（認知的不協和の解消）。先の章でも述べたように、就活の問題がすぐに解決するとは限らないとしても、問題への視点を変えることには大きな意味があるし、そうしたことができなければどんな社会問題であっても考えることはできない。けれども、そうした視点を受け入れることができないほど、就活に追い詰められている人がいるとしたら、彼らにどのように言葉をかければいいのか。僕はここで立ちすくんでしまうような気持ちがある。

しかし、就活デモは檜村（2013）が言うように、「当事者運動」ではないのだろうか^{viii}。そのような葛藤を、デモに参加した多くの人が持ちながら、それでも声を上げているのではないか。ここで、「当事者」という用語をどう定義するのかにもよるが、しかし「実際に就活を体験した・している」というごく狭い意味で「当事者」という言葉を用いるなら、必ずしも就活デモは「当事者運動」とは言えないと僕は思う。厳密に統計を取ったわけではないが、就活デモにおいて就活批判をしている学生たちは、皆が皆、就活をしているわけではない。もちろん、実際に就活を体験した者が企画に関わったり、参加していることも多いが、しかし中心になっているのは、就活をまだ経験していない学年の学生や、就活というルートにもはや興味がないような学生が多いというのが現実である。就活前に就活の問題を考えすぎて、新卒就活のルールに乗るのをやめてしまう人もいる。

もちろん、就活の問題については、それが新卒一括採用その他の広範な雇用システムとつながっているという意味で、決して就活を実際にしているものだけが関係者・当事者であるということはないし、この社会で労働というものと向き合う全ての人が無関係ではないと言っても過言ではない。しかし、やはり、ここで就活を体験しているかどうかということで、そこで発せられる言説における意味合いや深みは変わってくるだろう。そして、その意味で就活デモにおいては、（それぞれのデモによっても差はあれど）そうしたことに伴う葛藤はあまり表に出てこないのが実情なのではないか。^{ix}

もちろん、就活の問題に関心がありながらも声を上げる人ができない人の代わりに、誰

かが声を上げるということにも、十分に意味はある。けれども、就活デモが、本当に就活に追い詰められている人を代弁することがどれだけできるのか、時に反語のように自問してしまうような気持ちが僕の中にはあるし、やはりそこには限界があるのではないかとも思う。就活デモに「合う人」「合わない人」がいるのは仕方ないとして、では（狭い意味での）「当事者」が抱く、葛藤や苦悩含みの声がよく聞こえる場所はどこなのだろうか。

社会運動の現場から排除される人々

次に、上の内容と関連して、「就活デモにどのような人は参加できていないのか」を考えたい。これは、非常に根本的な問いであり、就活デモの各実行委員会内部で、そのような総括や反省をしたグループはおそらく一つもないのではないかと思う。なぜなら、彼らはデモに参加できているからである。そこに「いる人」にとって「いない人」の存在は議論にならない。

特に僕が関心を持っているのは、就活デモにかぎらない問題ではあるが、社会運動や活動の場においてたびたび（あるいは頻繁に）起こる問題である、ハラスメント問題である。これは、活動の内部で一定の人々が、集団内の多数派の規範や特定の人物の行動によって不快な目にあったりするという事で、これが問題として共有され、改善などがはからなければ、被害を受けた人は活動から身を引いてしまうことにもなる。色々なパターンがあるかもしれないが、特によくあるのはセクハラの種類である。こうした活動においては、しばしば男性の参加者が多くなることで、男性が活動の中心になりやすい。それゆえに女性（あるいはセクシャルマイノリティ当事者）がホモソーシャルな状況の中で居心地が悪いと感じたり、あるいはセクハラを受けたり、特定の作業や仕事を任されるといったジェンダーハラスメントが発生することがよくある。過去にいくつも行われた就活デモにおいても、そうしたことは程度の差はあれ起こってきたと思うし、それがはっきりと問題と見なされることなく終わってきたという事例はいくらでもあると思う。

もちろん、デモによっては女性が主催者になった場合などもあるし、就活デモの全てが男性中心に行われたと言い切るつもりはない。また、こうしたハラスメントは就活デモに限った話ではなく、一般的な活動において起こりやすいという話でもあるので、就活デモの担い手が特別にマッチョでホモソーシャルであると言いたいわけではない。往々にして、この社会の中のマッチョ、ホモソーシャルな要素が批判的に考えられることなく運動の場面にも流入し、再生産されているということなのだろうとは思ふ。しかし、「だからハラスメントが起きても仕方ない」という気は全くなく、内部での検証や学習などを含めて、批判的に取り組まれないといけない問題である。外部からでも寄せられた批判には、（それが的はずれであることも少なくないとしても）丁寧に考えるべきだとは思ふ。とにかく、ジェンダーを中心としたハラスメント問題が、一定の人々を排除することは確かである。だから、社会的な差別や抑圧に対して抵抗する運動であっても、その内部で差別や抑圧を

再生産する可能性は常にあるということには注意が必要である。

また、ハラスメントとは異なるが、作業分担などがうまく機能しないなどで、少数の個人に過剰な負担がかかり、燃え尽きたりするということが珍しくない。他にも、メンバー内で、方針を巡って分裂が起きたり、人間関係で消耗したりして、運動が継続できなくなるということもある。それゆえ、本来であれば活動に参加する人をエンパワメントする効果があるはずの運動が、そこに参加する人をさらに追い詰めたり、苦勞を増やすこともある。だから、こうした運動が全ての人にとって上手く機能するとは限らない。社会運動というものの持続可能性というものを考えるなら、こうした問題は避けては通れないはずであるが、必ずしもそうした問題への意識が就活デモ関係者の中で共有されてるとは言いづらい状態があるのが現状である。このあたりの問題は、社会運動というものを決して理想化しないで捉え、その上で批判的に考えるためにも重要なポイントである^x。

個人的で社会的な経験

ところで、就活というある意味で社会のタブーのようになっている問題に正面から異議を唱える活動を始めた僕が、なぜこのように、ある意味でナイーブなことを書いているのかということ、説明しなければならぬ。それは端的に言って、僕自身がこうした運動を通して、疲弊した経験があるからである。就活デモを初めて実行した時（2009年）は、緊張や疲れはあれど、本当に解放されるような気分や達成感があった。その頃は、「これから自分も就活をやるんだろう」と思っていたが、しかし二回目のデモの時には、自分の就活のタイミングを逃したまま過ごしており、もはや就活問題の（狭義の）当事者ではありえなくなっていた。にも関わらず先頭に立って行動を起こしていることで、常に居心地の悪さは付きまとっていた。そして、二回目のデモの準備などで疲れ果て、デモが終わった後には完全にダウンしてしまった。僕は、就活関連のストレスや不安などにやられた人が、少しでも就活デモのような動きによって勇気づけられたりしてくれたらいいと思って、積極的に発言したり、デモのオーガナイズをしていたわけなのだが、そのうちに自分自身がやられてしまうというヘマをしたのである。そして、卒論も提出できず、進路未定のまま中途半端に留年することが決まってしまう。

先にも述べたが、2010年のデモは全国四カ所で行われ、各地のメディアなどでも積極的に取り上げられ、話題を呼んだ。また、東京のデモ実行委員の人々は、その後も院内集会や議員へのロビイングに精力的に動き出していた。しかし、そうした動きが話題になるのとは対照的に、僕自身は陰鬱な気持ちで日々を過ごしており、就活デモ（特に札幌の）を積極的に評価することができないでいた。実際に自分が元気がない状態になってみると、それまで自分が発してきたような言葉が虚しく、心に響いてこないということもあった。また、運動を通して憂鬱な状態になっている時に、ポジティブに社会を変革しようとしていく運動には、ついていけないような気持ちをおぼえることもあった。就活デモの意義を

語るような言葉を自分でも使っていたが、それでも割り切れない複雑な感情を抱えながら過ごしていたのである。

それから、僕が2010年の就活デモ（札幌）のことを振り返り、言葉にできるようになるまで、丸三年がかかった。書いた文章自体は僕のパソコンの中に眠っているが、自分がデモを通してどのような感情を持ったのか、あの時のデモの反省点はなんだったのかといったことを文字にする作業は、自分の心のなかに沈殿していたものをすくい上げ、整理する上で大きな意味があった。それを踏まえて、かつてデモと一緒に企画した友人の数人と話し、意見交換をし、そうしてようやくあの時のデモのことを、「黒歴史」でないものとして捉え直すことにまでいたったのである。自分が始め、尽力してきた運動を振り返るといえるのは、僕にとってそれほどの時間のかかる作業であった。もちろん、その上で反省点はいくらかもあるが、就活デモの意義をあらためて考えることにもなった。

ともかく、そのような変遷を経た後で、僕がコミットしたいと思えるような運動というのは、変革の言葉を強く訴えかけるものよりも、むしろそこに伴う弱みや葛藤などの、微妙で、言葉にしづらいものに目を向けるものになったのであるが、それがどのようにして可能なのかはまだよくわからない。

反貧困運動で有名なある活動家が、「居場所というのは、何もしなくてもそこに居ることが認められるような場所ではないといけない」といった趣旨のことを言っていたように記憶している。「抵抗などの態度を求められる場所では、ただ居ることが難しい」と。考えてみれば、まずもって就活のような問題に傷ついたりした人に必要なのは、その「傷付いた」という事実を誰かに受け止められること、場合によっては慰めてもらうことなのではないか。就活デモは、就活的価値観を内面化した人が、その後でその感情を不条理への怒りに変える「逆ギレ」の運動であり、それにマッチする人もいるだろう。しかし、誰もが不条理に対して怒ることができるわけでもないし、そもそも怒るためにもエネルギーが必要である。だから、就活の不条理を考え、共有するために必要なのは、怒ることを勧めるのではなく、まず「つらかったね」と声をかけることなのかもしれないし、自分の偽らざる感情をただ提示することのできる場をつくることなのかもしれない。そうした機会を作るような運動が、就活問題に関してもそれ以外でも必要なかもしれない、ということをぼんやりと思ったりしている。

6、おわりに

就活デモのこれまでをいくつかの視点で振り返ってみたが、やはりまとまりに欠けるものになってしまった。特に就活デモの意義（4章）と、そこへの反省や疑問（5章）で、矛盾ないしは分裂した文章に見えるかもしれないが、これは就活デモが持つ性質についての両側面であり、それを捉える僕自身の中に同居する複雑な感情の反映だとも言えるだろう。

社会運動というものに魅せられて興奮していた状態から、数年を経て、それを評価しつつも少し醒めたような目で見ている、という変化のあらわれでもある。

今回の記事のために、過去の各就活デモのブログなどをあらためて見てみた。そこで思ったのは、就活デモに参加した人がどのようなことを考えてデモを企画したり参加したのかということや、それに伴う葛藤、また時間が経ってからデモをどのように振り返るのか、といったことがほとんど見えないということであった。総括や振り返りが十分になされないのは、多くの場合、デモが終わって間もなく、実行委員が解散してしまうという性質に起因するだろう。しかし、一般的に言って社会運動というものは、そこに伴う「弱み」「弱さ」のようなものを見せることが、あまり得意でないようである。それは、往々にして言葉にしづらく、個人的な感情の集積であるのかもしれないが、しかしやはり社会的なものであることには違いない。強い言葉や、物事を変えることへの希望や意義を語る気持ちは大切であるが、同時にそれに伴う苦悩がどのようにしてあるのか。僕はそれが知りたい。

こうした記述の仕方をしたことで、就活デモ関係者の中には反発を覚える人も少なくないかもしれない。語弊のある箇所もあるだろうし、僕の視点はあまりにもナイーブに過ぎるのかもしれない。けれど、そうした視点を含めて語らなければ、僕にとってはリアリティのある文章にはならなかったのだという事実は、譲ることはできない。僕自身がこのような書き方をしたのは、やはり就活デモについての思い入れが人一倍あるからだし、また、就活デモのような活動をしたことで、(反省することはあれど)後悔することはないと思っていることも、あらためて強調しておきたい。

冒頭でも書いたが、「就活デモ全体がどのようなものだったのか」という総括は、僕個人の手にあまるものであるし、様々な人が様々に語っていくことで形作られるものだと思う。また、機会を見て各地域のデモ実行委員の人たちに詳しく話を聞いたり、あるいは可能な範囲でアンケート等を取って、「どう振り返るか」などを聞いてみたい気持ちもある。そこには、スローガンには割り切れない微妙な感情の動きがあるだろうし、そうした思考や感情の軌跡を垣間見て、記録することができたらおもしろいのではないかと思う。それが僕の今の関心であるし、あるいは課題なのかもしれない。

i 実はこれら就活デモとは同様の問題意識から行われている活動であっても、就活デモとは呼ばれていないものもある。たとえば、京都における共産党系自治会連合の京都府学連が企画し、2011年10月16日、2012年12月16日に行った「リクルートスーツデモ」は、就活問題をその主なテーマとしたデモではあるが、就活デモの「シリーズ」とは別物と捉えられているようである。そのため、就活デモ関係者の意識としては既存の党派とは一線を画すような意識はあるのかもしれないし、府学連側が就活デモを名乗っていないためであるかもしれない。僕個人としては、彼らの活動にも賛同するところである。

また、関連する活動として、フリーター労組周辺の人々が2011年に行った「ぶっ通しデモ」という企画の一つとして、「8.31 就活に異議あり!!!デモ」というデモが、2011年8月31日に行われているが、これも就活デモの一つとしてカウントされているのは聞いたことがない。これについては、詳しい理由はよくわからないが、単に存在があまり知られていないからかもしれない

ii 杉村太郎著『絶対内定2014』(2012)

iii 2011年度POSSEアンケート調査「若者の仕事とうつ」中間報告(『POSSE vol.10』)より

iv 厚生労働省『新規学卒者の事業所規模別・産業別離職状況』(2013)より

v 就活デモ札幌のブログにも転載してあるが、初出は、青森雇用・社会問題研究所「ニューズレター」34号。

vi 『論座』2007年1月号

vii たとえば、「やっば、おかしい日本のシューカツ!? 学生がホンネで語ろう! 就活シンポ」(就活シンポ)など。 <http://sksympo.exblog.jp/>

viii 樫村愛子『何者』と「就活デモ」を結ぶ線『現代思想』2013年4月号

ix 就活ぶっこわせデモのブログには、デモの企画に関わる学生たちによる主張が載っているのだが、それは主に「理性と衝動」に還元できるもので、その中間の、微妙な「感情」のようなものはあまり読み取れなかった。

x 関連して、社会運動の場面でポジティブな側面ばかりが記述される現象が踏むパターンについても簡単に書いておく。

デモのような目立つ行動を企画し、実行したり拡大したりしていくには、パワフルな人が積極的に行動を起こすことが多いが、そういう人が中心になっていくと、「強さ」が足りない人はついていけなくなったり、その「強さ」の個人間の差によってトラブルが起こる。ここでの「パワフル」「強さ」というのは婉曲的な表現であるが、バリエーションは様々にある。たとえば頭が良い、学歴がある、金がある、コミュニケーション能力、企画力、行動力などがある、社会的な地位の高さ、体力、メンタル的なタフさ、下ネタ耐性の高さなどがそれに類する。結局のところ、一般社会でも活躍できるような人が運動でも中心的になる傾向はあるということなのかもしれない。

しかし、こうした「強さ」がある人は、同じく運動している人や、参加できない人が抱えている「弱さ」や「つらさ」を理解できない(共感が働きづらい)ために、トラブルがトラブルと見なされない。そのため、グループとして取り組むべき問題が、(往々にして被害を受けた人間の)「個人的なダメさ」「繊細さ」に還元され、それについていけない人は離脱してゆく。この流れが、本文で述べた構造的な問題が個人的な問題に還元される構図と似ているのは、実に皮肉である。

離脱した人は、場合によってはさらなる被害や負担を強いられるために、それを問題として指摘しづらい一方、残った人は自分たちの活動や組織をポジティブに語り、記述する。だから、運動におけるネガティブな側面があっても、共有されにくいし、記述しづらい。また、トラブルは個人のプライバシーに関わる問題であることも多いため、当事者が振り返って言葉にすることが苦痛を伴ったり、時間がかかることも多い。あるいは、プライバシーに関わる問題であることを理由に、振り返りや総括がなされたりしても公開されづら

いこともある。

参考文献

赤木智弘「丸山眞男」をひっぱたきたい——31歳フリーター。希望は、戦争。』『論座』2007年1月号（2007）朝日新聞社

大滝雅史「就活くたばれデモ--「就活」を取り巻く構造的な問題と違和感」『ニューズレター』34号（2010）青森雇用・社会問題研究所

檜村愛子『「何者」と「就活デモ」を結ぶ線』『現代思想』2013年4月号（2013）青土社

荻谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学』（2010）東京大学出版会

川北稔「社会問題を「発見」する社会運動」『社会運動の社会学』（2004）

厚生労働省『新規学卒者の事業所規模別・産業別離職状況』（2013）

杉村太郎『絶対内定2014』（2012）ダイヤモンド社

森岡孝二編『就活とブラック企業』（2011）岩波書店

NPO法人POSSE『POSSE vol.10』（2011）合同出版

『現代思想』2013年4月号（2013）青土社

各就活デモブログ